

青年期における友人関係への動機づけが関係の希薄さに及ぼす影響

吉田 かける・谷口 淳一・中地 展生

問題

本研究では、友人関係への動機づけが友人関係の希薄さの程度に及ぼす影響について検討する。

青年期の友人関係

友人という存在は、家族との付き合い、職場での上司と部下といった仕事上の関係とは違い、不安や悩みを相談する相手、自身の能力を高めるための競争相手、楽しいことや悲しいことを共有し、互いを助け合うことができるものである。岡田(2008)は親密な友人関係が適応や精神的健康を高めていることを示し、友人とは日常生活において、気持ちを穏やかにして楽しく過ごし、自身の成長において必要不可欠な存在であるとしている。

青年期における友人関係の多くは、性格や行動に大きな影響を及ぼしていることが多くの研究で明らかにされている。坂本・高橋(2009)は、青年期は生活空間が広がり、児童期までの家庭を中心とした狭い人間関係から、より幅広い人間関係を構築していく時期であると指摘している。青年期の人間関係のなかでも特に友人関係について、詫摩・菅原・菅原(1989)によると、青年期は両親からの心理的離乳に伴い友人との親密さが増し、個人的な悩みなどを両親よりも友人に打ち明けるなど、深い友人関係を求めるようになるとしている。Furman & Buhrmester (1992)は青年期の友人関係は両親に代わって最大限のサポート源として機能することを示している。また、青年期の友人関係が社会化に果たす役割としての機能以外に、緊張や不安、孤独などの否定的感情を緩和・解消する、安定化の機能、対人関係場面での適切な行動を学習する機会としての社会的スキルの学習機能、友人が自分の行動や自己認知のモデルとなるモデル機能(松井, 1990; 岡田, 2010)が存在し、青年期の友人との関わりは非常に重要なものである。

友人関係の希薄さ

近年の青年期の友人関係は希薄化しているという研究が報告されている。そもそも、青年期の友人関係の特徴として単なる遊び仲間としての関係から意見をぶつけ、本音を言い合うことで内面の深いところで付き合い(落合・佐藤, 1996)ことが挙げられる。つまり、青年期の友人関係は本来、お互いに本音をぶつけ合い、相手の考え方や価値観を認め尊重し、相手のために出来ることを考え行動する利他的な関係であるのに対して、友人関係の希薄化とは、お互いに傷つけ合うことを避けて、互いの内面をさらけ出すような深い付き合いを避ける(岡田, 2007)ような関係である。このような関係では自分自身や他者を傷つけることを恐れ、相手との関わりを表面的なままにとどめる傾向がある(栗原,

1989)と指摘されている。昨今、このように青年期において、友人との深い関わりが少なくなり、本音をあまり話さないような浅い付き合いになっていることについてたびたび言及されている。

友人関係の希薄化の原因として高垣(1988)は、青年個々人はお互いに内面を通じた親しい関わりをもちたいと願っているにもかかわらず、一方で、周りの友人たちからそうした態度を茶化されバカにされるのではないかと恐れて、その結果として、お互いが自分の内面を見せなくなっている可能性があるとして述べている。千石(1991)も他者から暗いとか面白くない人と評価され仲間はずれにされることを極端に恐れ、そのために実際以上に明るく振舞い、深刻な話題を避けることを指摘している。しかし、詫摩ら(1989)は青年が互いに距離をとった対人関係をもつのは、排他的な態度や人間不信の表れというよりも、距離をおきながらも親しく付き合うといった大人にとって必要な対人スキルを身につけつつある証拠であると述べるなど、友人関係が希薄化しているとはいえないのではないかと意見も存在している。

友人関係の動機づけ

山中(1995)の研究では、大学入学から1ヶ月経った時点において友人が存在し、それどころか、入学式のほぼ初対面に近い時点で友人選択がなされ、友人関係が形成されている可能性が示唆されている。諸井(1986)は、一般に大学入学直後は友人関係への動機づけが高まっている状態であるとしている。一般的に入学直後は友人関係の動機づけが高い状態であるならば、なぜ、友人関係が希薄化していると指摘されるのだろうか。上記の研究では大学生は入学してすぐに友人関係を形成しようと積極的に行動することが示されているが、なかには友人関係に対して積極的に行動することができない人もいる。山中(1995)は、友人を作るため、友人になりたい人と一緒になったとき、相手を傷つけてしまう恐れのある、あるいは自分をさらけ出すことで相手に拒否される危険性を感じているのではないかと述べている。友人を作りたいが、その相手に嫌われたくないという「見捨てられることへの不安」や相手に対する「不信感」から気をつかい、互いの内面を見せない付き合いが生じると推測される。また、岡田(2005)は、自己決定理論の側面から友人関係の動機づけの研究を行っており、友人関係を営む上での自己決定的な動機づけの存在を示唆している。さらに、自己決定的な動機づけであると友人関係が親密になることを指摘している。つまり、友人関係を営むのに自己決定的でない動機づけ、また、自己決定的な動機づけで友人関係を行った場合でも、見捨てられる不安や不信感が芽生える

と徐々に内面を見せなくなり、それらが友人関係の希薄さへとつながると考えられる。

本研究では、友人関係の希薄さを調べる指標として、岡田(1999)が作成した「現代青年に特有な友人関係に関する尺度」の下位因子より、自分の内面を見せない内容の項目がある「自己閉鎖」を使用する。友人関係への動機づけの指標として、岡田(2005)が作成した「友人関係への動機づけ尺度」の下位因子より、自己決定性が高い動機である、友人に対する興味や楽しさから関係を行おうとする「内発的理由」、友人関係を積極的な価値観や重要性から行おうとする「同一化的理由」と、自己決定性が低い動機として、外的な報酬や友人からの働きかけによる「外的理由」と自尊心を保ち、恥や不安を低減するための「取り入れ的理由」を用いる。渡辺・今川(2011)の大学新入生の友人関係の研究では、友人関係に変化が見られると考え、大学入学3週目、2ヶ月目、3ヶ月目の3回にわたって調査を行っている。本研究においても友人関係の動機づけが高い状態から友人関係が希薄になるまでに期間がある可能性が考えられることから、最初の調査を大学入学直後の5月に行った後、その5ヶ月後の10月に2回目の調査を行う。

仮説

岡田(2007)の研究では、“他者から自分がどう思われているか気にする傾向”が強い人ほど、友人関係で群れて楽しい関係の維持と傷つけあわないように気をつかうことや周囲の視線に敏感で人に自分がどのように見られているか察知し、その都度行動が変化していることが明らかになっている。そこで、友人関係の希薄さと動機づけの観点から、動機づけが自己決定的か否かによって、友人関係の営み方に違いが現れ、関係の希薄さに影響を与えると考えられる。つまり、5月に自己決定的でない動機づけである、外的理由あるいは取り入れ的理由で友人関係を営んでいるほど、5月から10月にかけて友人関係の自己閉鎖性が高くなると考えられる(仮説1)。一方で、5月に自己決定性が高い動機づけである内発的理由あるいは同一化的理由で友人関係を営んでいるほど、5月から10月にかけて友人関係の自己閉鎖傾向が弱くなると考えられる(仮説2)。また、自己決定的な動機づけがあっても、実際の友人の言動が関係の希薄さに影響を与える可能性も踏まえ、5月に自己決定性が高い動機づけである内発的理由あるいは同一化的理由で友人関係を営んでも、10月に不信や見捨てられ不安が高いと10月の自己閉鎖傾向は強くなると考えられる(仮説3)。

方法

調査参加者

1回目の調査は大学生112名(男性33名、女性79名、平均年齢 18.42 ± 0.95 歳)が調査に参加し、2回目の調査では、大学生104名(男性39名、女性65名、平均年齢 18.88 ± 1.10 歳)が調査に参加した。この中から、本研究では大学1年生

のデータのみを分析に用いており、1回目は101名(男性30名、女性71名、平均年齢 18.24 ± 0.68 歳)と2回目は93名(男性26名、女性63名、平均年齢 18.63 ± 0.70 歳)であり、1回目と2回目の両方の調査に回答したのは、大学1年生89名(男性26名、女性63名、平均年齢 18.27 ± 0.72 歳)であった。

調査時期

1回目の調査は2013年5月上旬、2回目の調査は同年10月中旬に行った。

質問紙

友人関係

岡田(1999)が作成した、現代青年に特有の友人関係に関する尺度から“本当の気持ちは話さない”などの項目がある「自己閉鎖」の6項目、“その友人からバカにされないように気をつける”などの項目がある「傷つけられることの回避」の5項目、“その友人の気持ちに気をつかう”などの項目がある「傷つけることの回避」の5項目、“冗談を言って、その友人を笑わせる”などの項目がある「快活的関係」の5項目の合計21項目を用いた。友人関係の質問への回答の前に“大学内での友人のうち、最も関わりのある同性の友人”を1人だけ、思い浮かべさせ、その友人のイニシャルを記入させたのち、その友人との関係について、質問への回答を求めた。本研究では特定の友人関係ではなく、友人関係全般について調べることを目的としている。ただし、友人関係全般について回答することは困難であることが予測されたため、最も関わりのある友人について回答を求めた。これは、そのような友人との関わり方に、友人関係全般への関わり方に対する個人の特徴が表れやすいと考えたからである。また、2回目の調査では、思い浮かべた友人が1回目の調査で回答した友人と同じかどうかについて回答を求めたが、「同じ人物」と想定していた回答者は33名、「違う人物」を想定していた回答者は43名、同じ人物であるか違う人物であるかを特定できなかった回答者が13名であった。本研究では、上記の理由により、1回目と2回目で想定した友人が同じであるかどうかは区別せずに分析を行った。回答は「1:全くあてはまらない～6:かなりあてはまる」の6件法で求めた。

友人関係への動機づけ

岡田(2005)が作成した、友人関係への動機づけ尺度から“友人と一緒にいるのは楽しいから”などの項目がある「内発的理由」の4項目、“友人のことをよく知るのは、価値のあることだから”などの項目がある「同一化的理由」の4項目、“友人がいないと、後で困るから”などの項目がある「取り入れ的理由」の4項目、“友人関係を作っておくように、まわりから言われるから”などの項目がある「外的理由」の4項目の合計16項目を用いた。友人関係への動機づけの質問は、全般的な友人関係に対して回答を求めた。回答は「1:あてはまらない～5:あてはまる」の5件法で求めた。

友人に対する不信感

天貝(1997)が作成した、信頼感尺度から下位因子である

“今心から頼れる人にもいつか裏切られるかもしれないと思う。”や“気をつけていないと、人は私の弱みにつけ込まうとするだろう。”などの項目がある「不信」の中から因子負荷量が高い8項目を用いた。回答は友人に対する不信感の質問は、全般的な友人関係に対して回答を求めた。「1:全くあてはまらない～6:非常によくあてはまる」の6件法で求めた。

見捨てられ不安

中尾・加藤(2004)が作成した、成人愛着スタイル尺度(ECR)の日本語版である、一般他者版成人愛着スタイル尺度(ECR-GO)から、下位因子である“私は、いろいろな人との関係について、非常に心配している。”や“私は、知り合いを失うのではないかとけっこう心配している。”などの項目がある「見捨てられ不安」の中から因子負荷量が高い5項目を用いた。見捨てられ不安の質問は、一般的な対人関係での感情について回答を求めた。回答は「1:全くあてはまらない～7:非常によくあてはまる」の7件法で求めた。

手続き

1回目、2回目の調査、両方とも大学での講義中に上記の質問紙を配布し、回答を求めた。

結果

因子分析および信頼性分析

1回目の調査の友人関係への動機づけ、友人関係の各尺度の下位因子について因子分析を行った。また、上記の質問尺度を含む、不信、見捨てられ不安、それぞれの1回目と2回目の信頼性分析を行った。

友人関係への動機づけ

友人関係への動機づけ尺度の各項目について、岡田(2005)の先行研究に従って、 α 係数を算出したが内的整合性が低かったため(「内発的理由」 $\alpha = .58$, 「同一化的理由」 $\alpha = .66$, 「取り入れ的理由」 $\alpha = .54$, 「外的理由」 $\alpha = .47$)、再度、主因子法のPromax回転による因子分析を行った。ただし、項目1“親しくしていないと、友人ががっかりするから”項目6“友人とは親しくしておくべきだから”項目11“友人ということで、幸せになれるから”の3項目は複数の因子に因子負荷量が高かったため、以降の分析から除外した。その結果、4因子が抽出された。第1因子は“友人と話すのは、おもしろいから”“友人と親しくなるのは、うれしいことだから”など内発的理由と同一化的理由の項目を含んでおり、友人関係に対して前向きであることから「ポジティブ理由」因子(6項目:1回目 $\alpha = .94$ (2回目 $\alpha = .92$))とした。第2因子は“友人がいないと不安だから”“友人がいないと、後で困るから”など、日常生活を過ごすために友人関係を1つの方法と捉えていること、岡田(2005)の先行研究と対応する項目によって構成されていたため「取り入れ的理由」因子(3項目: .73 (.72))とした。第3因子は“友人を作っておくように、まわりから言われるから”“一緒にいないと、友人が怒るから”など、自分ではなく、外からによって関係を形成しようとすることから、

こちらにも岡田(2005)の先行研究と対応する項目によって構成されていたため、「外的理由」因子(2項目: .49 (.65))とした。第4因子は“友人のことをよく知るのには、価値のあることだから”“友人のほうから、話しかけてくるから”など友人に対して、合理的に捉えていることから「合理的理由」因子(2項目: .48 (.29))としたが、内的整合性が低いいため、以降の分析には用いなかった。

友人関係

友人関係尺度の各項目について主因子法のPromax回転による因子分析を行った。ただし、項目11“その友人の前で恥をかかないように気をつける”はいずれの因子への負荷量が低かったため、以降の分析から除外した。その結果、4因子が抽出された。第1因子は“その友人の前で、はしゃぐ”“冗談を言って、その友人を笑わせる”など、友人を喜ばそうとすることから「快活的関係」因子(5項目: .90 (.88))とした。第2因子は“本当の気持ちは話さない”“あたりさわりのない会話ですませる”など、自分のことを隠すような行動のため、「自己閉鎖」因子(7項目: .85 (.85))とした。第3因子は“その友人からどう見られているか気にする”“その友人からバカにされないように気をつける”など、自分が傷つかないように注意する行動から「傷つけられることの回避」因子(4項目: .67 (.64))とした。第4因子は“その友人の内面に土足で踏み込まないようにする”“お互いのプライバシーに立ち入らない”など、第3因子である「傷つけられることの回避」因子とは反対に相手を傷つけないようにする行動から「傷つけることの回避」因子(4項目: .64 (.67))とした。

不信

不信の8項目においてCronbachの α 係数を求めた。その結果、.90 (.91)と十分な内的整合性であることが示された。

見捨てられ不安

見捨てられ不安の5項目においてCronbachの α 係数を求めた。その結果、.82 (.79)と十分な内的整合性であることが示された。

記述統計

各変数の5月と10月の平均値と標準偏差を算出し、対応のあるt検定による比較を行った(Table 1)。その結果、「不信」以外の変数は有意な差が認められなかった。「不信」のみ5月より10月の数値が有意に高くなっていることが認められた($t(88) = 2.89, p < .01$)。

仮説の検討

本研究における3つの仮説について検討するために以下の分析を行った。

相関分析

仮説1と2を検討するために、5月の「友人関係への動機づけ」の3つの下位因子と「友人関係」の4つの下位因子および、「不信」、「見捨てられ不安」それぞれの5月から10月にかけての変化量との相関関係を算出した。結果をTable

Table 1 各変数の5月(1回目)と10月(2回目)の記述統計

	5月(1回目) 平均値 (SD)	10月(2回目) 平均値 (SD)	t値
ポジティブ理由	4.33 (0.73)	4.18 (0.69)	1.52
取り入れ的理由	2.88 (1.01)	2.98 (0.87)	0.91
外的理由	1.99 (0.78)	2.02 (0.83)	0.29
自己閉鎖	2.93 (0.89)	2.91 (0.89)	0.79
快活的関係	4.29 (1.05)	4.33 (0.94)	0.45
傷つけられる ことの回避	3.29 (0.87)	3.22 (0.79)	0.64
傷つける ことの回避	3.51 (0.88)	3.56 (0.75)	0.49
不信	3.22 (1.04)	3.47 (1.00)	2.89 **
見捨てられ不安	4.14 (1.24)	4.29 (1.15)	1.42

p < .01 **

2に示す(なお、変数名の後の Δ は変化量を示す)。その結果、「ポジティブ理由」および「外的理由」は各変数の変化量のいずれとも有意な相関を示さなかった。「取り入れ的理由」は「不信 Δ 」とは有意な負の相関を示していた。また、「友人関係」のうち、「自己閉鎖 Δ 」とは有意な負の相関を示していた。

階層的重回帰分析

仮説3を検討するために、10月の「自己閉鎖」を基準変

数として、step1に5月の「ポジティブ理由」を、step2に10月の「不信」、「見捨てられ不安」のいずれかをstep3にstep1とstep2に投入した変数の交互作用項を説明変数として投入する階層的重回帰分析を行った。

その結果、step3において、ポジティブ理由(5月) \times 不信(10月)、およびポジティブ理由(5月) \times 見捨てられ不安(10月)の交互作用項が有意になっていた(Table 3参照)。それぞれ下位検定を行ったところ、5月にポジティブ理由が高い(+1SD)場合に、10月の不信($\beta = .54, p < .001$)、および見捨てられ不安($\beta = .52, p < .001$)が、10月の自己閉鎖を有意に予測していたが、ポジティブ理由が低い(-1SD)場合には有意に予測していなかった(順に $\beta = -.24, n.s.$; $\beta = .06, n.s.$)。Figure 1, Figure 2に示したように、5月のポジティブ理由が高くても、10月の不信や見捨てられ不安が高いと、10月の自己閉鎖傾向が高くなっていた。

考察

本研究は、大学生における友人関係への動機づけが友人関係の希薄さに及ぼす影響について検討することを目的とした。「5月に外的理由あるいは取り入れ的理由で友人関係を営んでいるほど、5月から10月にかけて友人関係の自己閉鎖傾向が強くなる」、「5月に内発的理由あるいは同一化的理由で友人関係を営んでいるほど、5月から10月にかけて友人関係の自己閉鎖傾向が弱くなる」、「5月に自己決定性が高い動機づけである内発的理由あるいは同一化的理由で友人関係を営んでも、10月に不信や見捨て

Table 2 5月の「友人関係への動機づけ」と「友人関係」、「不信」、「見捨てられ不安」それぞれの5月から10月にかけての変化量の相関関係

	自己閉鎖 Δ	快活的関係 Δ	傷つけられる ことの回避 Δ	傷つけることの 回避 Δ	不信 Δ	見捨てられ不安 Δ
ポジティブ理由	.06	-.20	.13	-.02	.13	.08
取り入れ的理由	-.25 *	.01	-.19	.03	-.33 *	-.07
外的理由	.00	-.19	-.01	.12	-.07	-.08

** < .01 * < .05

Table 3 10月の自己閉鎖を基準変数とした重回帰分析 (ポジティブ理由)

	β	R^2	ΔR^2		β	R^2	ΔR^2
step 1		.05 *		step 1		.05 *	
ポジティブ理由(5月)	-.21 *			ポジティブ理由(5月)	-.21 *		
step 2		.13 **	.09 **	step 2		.15 **	.11 **
ポジティブ理由(5月)	-.18 †			ポジティブ理由(5月)	-.21 *		
不信(10月)	.30 **			見捨てられ不安(10月)	.32 **		
step 3		.20 **	.06 *	step 3		.18 **	.03 †
ポジティブ理由(5月)	-.21 *			ポジティブ理由(5月)	-.12		
不信(10月)	.15			見捨てられ不安(10月)	.29 **		
交互作用項	.29 *			交互作用項	.20 *		

** p < .01, * p < .05, † p < .10

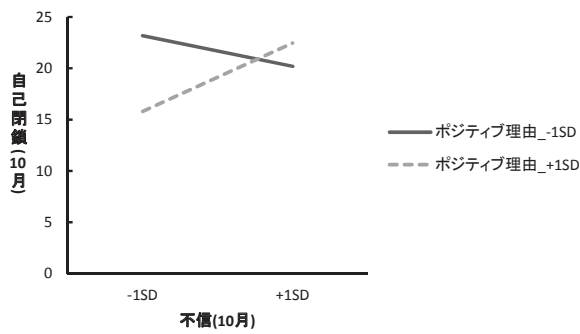


Figure 1 5月のポジティブ理由と10月の不信による10月の自己閉鎖

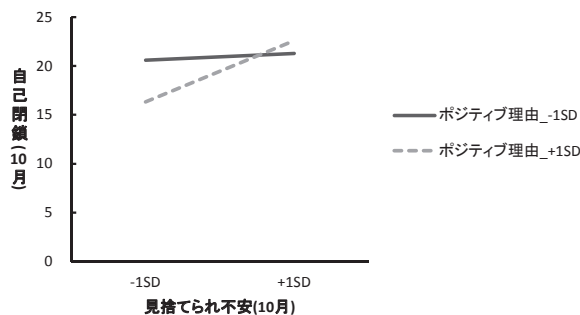


Figure 2 5月のポジティブ理由と10月の見捨てられ不安による10月の自己閉鎖

られ不安が高いと10月の自己閉鎖傾向は強くなる」という3つの仮説を設定し調査を行った。

外的理由・取り入れ的理由の希薄さへの影響

仮説1は支持されなかった。「外的理由」は“友人を作っておくように、まわりから言われるから”など、他者からの行動によって友人関係を形成しており、自発的ではないため、自己閉鎖の傾向が強くなると考えていた。しかし、その後の自己閉鎖の変化量との間に関連が見られなかったことから、5月に「外的理由」が高かった場合でも、その後、友人関係に対して、それが希薄になるような不満を抱かなかったと考えられる。別の解釈としては、5月に「外的理由」が高かった人は、その後、自発的に友人関係を形成していくことがなく、友人に対して無関心に近い行動を行っていたために自己閉鎖の傾向が変化しなかった可能性も考えられる。

Ryan & Deci (2000)は対人不安に関して概念的に「取り入れ」は不安が友人関係の動機づけになっていることを示している。本研究において、「取り入れの理由」は「自己閉鎖」の変化量とだけでなく「不信」の変化量とも有意な負の相関が示された。これらは“友人がいないと不安だから”といった友人がいないことに不安を感じ、友人関係を作ろうとし、そして、友人を失って一人になることの恐れが自分の内面を見せない自己閉鎖の傾向を強めるのではなく、反対に自分の内面を見せ、信頼されようとしたことで自己閉鎖の傾向が弱くなり、不信も低くなったと推測される。

ポジティブ理由の希薄さへの影響

仮説2も支持されなかった。浅野(2006)は現代の青年は多くのチャンネルを持ち、状況に応じてそれぞれの関係を選択的に使い分けていると指摘している。また、福重(2007)の研究では、友人関係の中に「希薄なもの」と「親密なもの」が混在し、友人関係が希薄であるか否かの判断基準のうち、自己の内面を開示する度合いが浅いか深いかは重要な意味をもたなくなっている可能性を述べている。そして、現代青年は他者との接触が増加したため「希薄」と「親密」の使い分けが求められている(小泉・小池, 2011)。このことから、友人に対して、「楽しい」や「価値のあるもの」と考える「ポジティブ理由」から友人関係を自発的に作るが、授業や授業以外の時間、部活・サークルなど、自分がいる状況に応じて関わる友人を変え、選択的に使い分けているため、大学内で最も関わりのある友人に対しても友人関係が深くなるほどの自己閉鎖の傾向が変化しなかったと考えられる。別の解釈として、5月に「ポジティブ理由」が高く、友人を楽しくて大事なものだと考えているものの、「希薄」と「親密」が混在し、使い分けているために自己閉鎖の傾向が変化しなかった可能性があると推測される。

不信・見捨てられ不安が希薄さに与える影響

仮説3は支持された。まず、不信について、水野・田積・炭谷・多胡(2007)の研究では、大学新生の不信感は何月が進むにつれて高くなっていると報告している。また、水野ら(2007)は学校生活が始まり、新しい友人関係を築いていくなかで、当初持っていた他者への期待を裏切られる経験をしやすく、それが他者への不信感を高めていったと示唆している。山中(1995)は大学入学1ヶ月後で友人ができた契機として“同じ授業を受講した”、“帰る方向が同じである”などが挙げられ、友人選択が行われていることを報告している。これらのことから本研究の結果を考えると、大学に入学する前の環境から友人に対して良い印象を持っており、そのことから、大学進学直後にポジティブ理由による動機づけで同じ授業を受けている人や授業で座る席が近い人と友人関係を作っていくが、学校生活を送っていくことで互いを知るうちに自分が考えていた友人関係とのズレが生じ、そのズレが友人に対する不信や見捨てられ不安に変化することもあるため、5月にポジティブ理由で友人関係を行っていたも、10月に不信あるいは見捨てられ不安が高い場合は、自己閉鎖が高くなったと考えられる。

不信や見捨てられ不安の高さから自己閉鎖の傾向が強くなったという本研究の結果は、岸川・金児(2000)の状態不安が高い場合、他者へ同調することで不安を低減させるとの結果と一致する。また、他者からどう思われるかを気にすることで自分を偽ってでも、他人から認めてもらおうとする(葛西・松本, 2010)ことも指摘されている。友人に対して不信や見捨てられ不安を感じたことで友人関係が失われることを恐れるあまり、自分を偽って本音を言わないなどの自己閉鎖の行動をとることで表面的ではあるが友人関係を維持し

ようとするため、自己閉鎖の傾向が強くなったと推測される。

結論

本研究では、5月の友人関係への動機づけにおいて「取り入れ的理由」のみ、5月から10月にかけての自己閉鎖の傾向を弱め、友人関係は希薄化せず、深めようとする反対の影響が見られた。「外的理由」は自己決定性の低い動機であるが、友人関係の希薄さに何も影響が見られなかった。また、友人は楽しくて、大事なものと考えている「ポジティブ理由」も自己閉鎖の傾向に何も影響が見られなかった。さらに、友人がいないことに不安だと考えている「取り入れ的理由」の方が「不信」を弱める影響が見られた。一方で、「取り入れ的理由」の内容から、一人でいることに恥や不安を感じるあまり、友人関係に依存してしまう可能性も考えられる。

以上のことから、本研究では、大学生の友人関係において、友人がいないことへの不安や恥に感じることの動機づけが関係の希薄さを弱め、深くなる傾向を示した。また、友人を自発的に営もうとした場合に、友人に対する不信が高いと関係が希薄になることが明らかになった。

今後の課題

5月にポジティブ理由で友人関係を営み、10月に不信あるいは見捨てられ不安が高くなると10月の自己閉鎖の傾向が強くなり、友人関係の希薄さに影響することが判明した。5月の「ポジティブ理由」と5月から10月にかけての自己閉鎖の傾向との間には影響が見られなかったが、そこに「不信」もしくは「見捨てられ不安」が加わることで友人関係の希薄さにつながっており、また、「不信」は「取り入れ的理由」との間にも影響があることから、「不信」が重要であることが示唆される。

課題として「不信」と「友人関係の希薄」との関連について、なぜ、「不信」が高くなったのか、その要因をさらに深く検討する必要がある。

引用文献

- 天貝由美子 (1997). 成人期から老年期に渡る信頼感の発達—家族および友人からのサポート感の影響—教育心理学研究, **45**, 79-86.
- 浅野智彦 (2006). 若者の現在 浅野智彦(編) 検証・若者の変貌・失われた10年後の後に— 勁草書房
- 福重 清 (2007). 変わりゆく「親しさ」と「友だち」—現代の若者と人間関係— 高橋勇悦 他(編) 現代日本の人間関係 団塊ジュニアからのアプローチ 学文社
- Furman, W., & Buhrmester, D. (1992). Age and sex differences in perception of networks of personal relationships. *Child Development*, **63**, 103-115.
- 葛西真紀子・松本麻里 (2010). 青年期の友人関係における同調行動—同調行動尺度の作成— 鳴門教育大学研究紀要, **25**, 189-203.
- 岸川真理子・金児曉嗣 (2000). 同調行動による状態不安の低減—判断に直接関係しない状態不安によっても同調行動は促進されるのか— 第64回日本心理学会大会発表, 151.
- 栗原 彬 (1989). やさしさの存在証明: 若者とインターフェイス 新曜社
- 松井 豊 (1990). 友人関係の機能 斉藤耕二・菊池章夫(編) 社会化の心理学ハンドブック 川島書店
- 水野邦夫・田積 徹・炭谷将史・多胡陽介 (2007). 大学新入生の大学適応を促進するプログラムの検討 聖泉論叢, **15**, 125-140.
- 文部科学省 (2013). 平成25年度 学校基本調査(速報値)の公表について 生涯学習政策局政策課
- 諸井克英 (1986). 大学新入生の生活事態変化に伴う孤独感 実験社会心理学研究, **25**, 115-125.
- 中尾達馬・加藤和生 (2004). “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, **5**, 19-27.
- 西垣悦代 (2009). 発達・社会からみる人間関係 現代に生きる青年のために 北大路書房
- 落合良介・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあひ方の発達的变化 教育心理学研究, **44**, 55-65.
- 岡田 涼 (2005). 友人関係への動機づけ尺度の作成および妥当性・信頼性の検討—自己決定理論の枠組みからパーソナリティ研究, **14**, 101-112.
- 岡田 涼 (2006). 青年期における友人関係への動機づけの発達の変化—横断的データによる検討— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要・心理発達科学, **53**, 133-140.
- 岡田 涼 (2008). 親密な友人関係の形成・維持過程の動機づけモデルの構築 教育心理学研究, **56**, 575-588.
- 岡田 努 (1999). 現代青年に特有な友人関係の取り方と自己愛傾向の関連について 立教大学教職研究, **9**, 21-31.
- 岡田 努 (2007). 現代青年の心理学 若者の心の虚像と実像 世界思想社
- 岡田 努 (2010). 青年期の友人関係と自己 現代青年の友人認知と自己の発達 世界思想社
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000). Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, **55**, 68-78.
- 坂本 安・高橋靖恵 (2009). 友人関係における心理的距離のズレと疎外感の関連 青年心理学研究, **21**, 69-81.
- 千石 保 (1991). 「まじめ」の崩壊: 平成日本の若者たち サイマル出版会
- 泉水清志・小池庸生 (2011). 現代青年の友人関係に及ぼす要因 育英短期大学紀要, **28**, 23-32.
- 高垣忠一郎 (1988). 自分をつくる 心理科学研究会(編) かなりあ青年心理学 青木書店
- 詫摩武俊・菅原健介・菅原ますみ (1989). 羊たちの反乱: 現代青少年の心のゆくえ 福武書店
- 和田 実 (2001). 性、物理的距離が新旧の同性友人関係に及ぼす影響 心理学研究, **72**, 186-194.
- 渡辺 舞・今川民雄 (2011). 大学新入生の友人選択状況が親密化過程に及ぼす影響 社会心理学研究, **27**, 31-40.
- 山中一英 (1995). 対人関係の親密化過程に関する質的データに基づく考察 名古屋大学教育学部紀要, **42**, 127-134.

The influence of friendship motivation on tenuous friendships

Kakeru YOSHIDA, Junichi TANIGUCHI and Nobuo NAKAJI

Abstract

This study examined the influence of friendship motivation on tenuous friendships, using a longitudinal design. University freshmen ($N=89$) completed a self-report questionnaire including measures of friendship motivation and tenuous friendships one month after enrollment (in May). They answered the same questionnaire after summer break (in October). Results showed that freshmen who had been ashamed of being alone in May were more likely to establish intimate friendships in October, implying that such students might try to depend on friends in order to avoid being alone. In addition, among those who had valued good friendships in May, freshmen high in distrust of friends or abandoned anxiety tended to have tenuous friendships in October. Considering these results, future studies should develop and explore a preventive intervention buffering against the interactive effects between friendship motivation, distrust, and abandoned anxiety on tenuous friendships during the first semester.

Keywords: friendship motivation, tenuous friendship, distrust, abandoned anxiety